

令和元年（二〇一九）十一月二十三日 「日本学賞」 第七回贈呈式の受賞卓話

「宮廷儀式研究の歩み」（三十分） 要旨

（京都産業大学名誉教授・モラロジー研究所教授） 所 功（77）

- (1) このたび「日本の伝統的儀礼制度に関する研究」を過分に御評価賜わり、「令和」最初の「日本学賞」を授与されますことは、市井の一研究者として光栄の上なく存じます。
- (2) 私は岐阜の田舎に生まれましたが、高校時代から皇室に関心を寄せ、名古屋大学では、平安時代の宮廷貴族（文人官吏）三善清行の伝記と著作の研究を中心に取り組みました。
- (3) しかし、昭和四十一年（一九六六）から勤めた皇學館大学では、伊勢神宮の式年遷宮に関する諸祭儀を拝見して、奥床しく雅な神道祭祀に興味をもち、またそれが平安時代の宮廷社会における儀式の実態解明にも役立つと直感しました。
- (4) そこで、昭和五十年（一九七五）より文部省に勤めたころから、当時ほとんどの歴史家が無関心だった宮廷儀式の本格的な研究を志し、まず戦前までのオーソドックスな有識学者らによる著書を読み直し始めました。
- (5) ところが、それには平安以来の膨大な儀式書・記録類を古写本にまで遡って徹底調査する必要に迫られ、そんな基礎作業に十年近く取り組みました。そのような成果を纏めた論文集『平安朝儀式書成立史の研究』（国書刊行会）は、幸い学界で少し評価され、また同六十一年（一九七六）慶応大学より法学博士（日本法制文化史）の学位を授与されました。
- (6) その五年前から通計三十一年間勤めた京都産業大学では、日本法制史などの授業を担当しながら、平成七年（一九九五）に設立された日本文化研究所を中心に、学内外の有志たちと宮廷文化などの共同研究を続けることができました。
- (7) さらに平成二十四年（二〇二二）から勤めているモラロジー研究所では、「皇室関係資料文庫」という窓口を設け、若い研究員と力を合せて、宮廷文化・皇室儀礼などに関する多彩な史資料情報の収集・考証・発信に努めております。
- (8) 叙上のとおり私は、平安宮廷社会で励行されてきた儀式に関する基礎的な調査研究を、半世紀余り続けてきました。その前半は「昭和」、後半は「平成」でしたが、今や「令和」という「麗しい和の精神」を理想に掲げる新元号の御代を迎えています。
- (9) この御代替りに伴う重要な儀式は、既に恙なく執り行われました。その即位礼も大嘗祭も、千三百年以上の歴史を持つ超国宝級の現に生きている至高の伝統文化です。そこには、日本古来の要素と唐風・洋風の要素とが、見事に調和しており、日本の文化力の英知を学ぶことができます。
- (10) こうした宮廷文化に関する史資料は、京都御所にも宮内庁にも民間の随所にも、極めて多く伝存しています。それらを丹念に研究し続けることは、学問的に十分意義があると思われ、喜寿を越す私も、生涯微力を尽くしたいと存じます。さらに、この貴重な宮廷文化を国内外の人々に判り易く伝える工夫と努力も心懸けて参ります。